

III. 遺 物

1. 埴輪 (PL.12、fig.16・17)

円筒埴輪 2～4は埴輪列、5・6は周濠内、7は整地土から出土。2～6は幅5～6cmの粘土板2～3枚で基部を作り、その上に粘土紐を逆時計まわりに巻上げ、各段を目処とする製作段階が認められるが、基底部の歪みの著しいものが多い。凸帯はりつけ前の第1次調整にタテハケ、凸帯はりつけ後の第2次調整にB種ヨコハケを使用。基底部の第2次調整を欠く例もある。内面はタテ・ナナメ方向のナデ調整である。透孔は円形だが、配置は不明(6・17)。口縁部は直口縁(18)と強い外反(16)の2種あり、量的比率は不明。外面に刻文をもつ例もある(PL.12～20)。基底部の極度に短い19もある。外面にタテ方向の黒斑がつき、野焼焼成と考える。7は成形^{註1}調整は他と同じだが、無黒斑からみて窖窯焼成であり、市庭古墳に伴うとは考えられない。

朝顔形埴輪(1・13～15) 頸部(1)、口縁端部(14)、朝顔状に開く口縁の屈曲部(13)、頸部から半球状の胴部

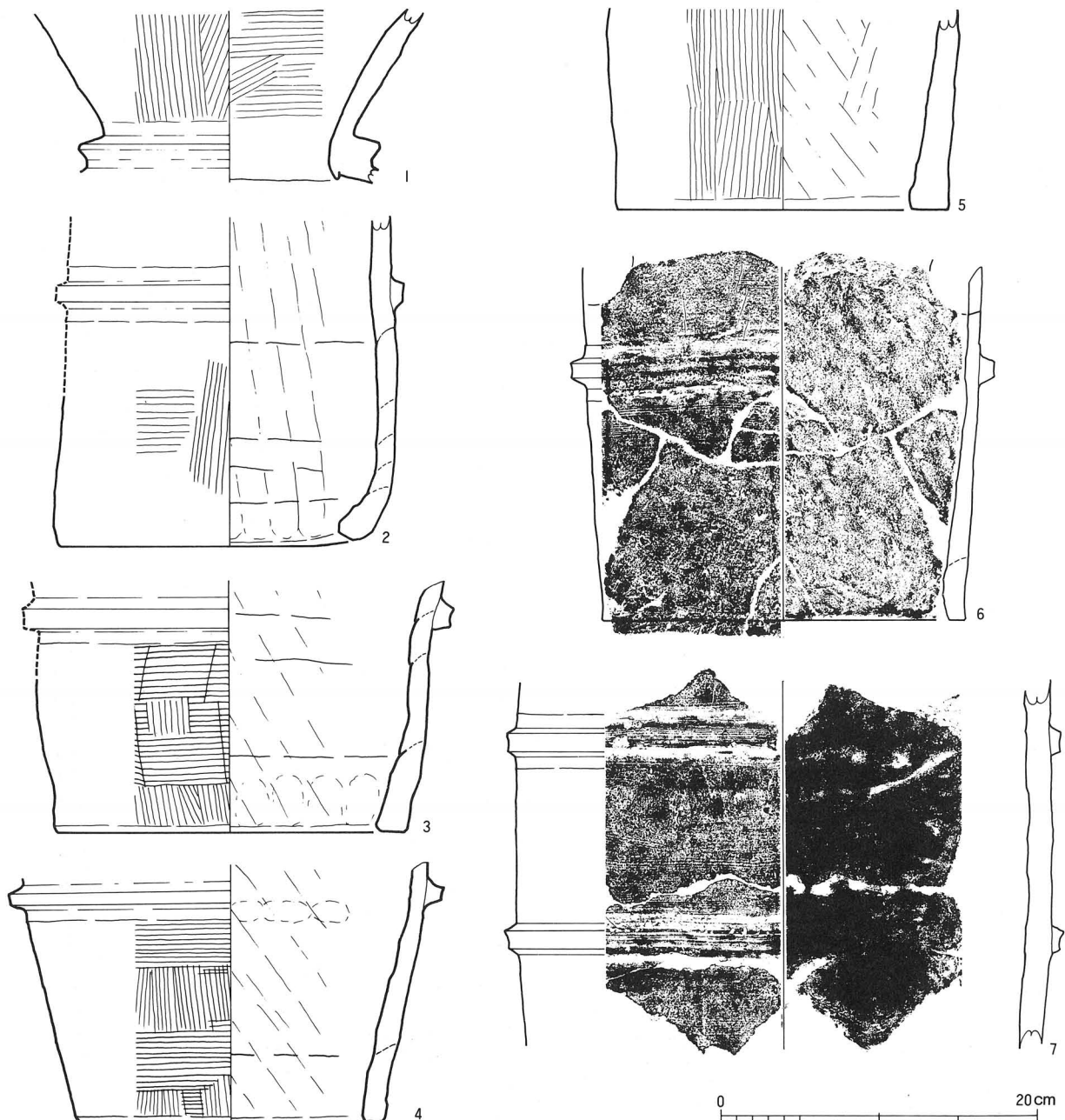


fig.16 埴輪実測図

にいたるもの(15)がある。外面には赤色塗彩がみられる。

形象埴輪 蓋形埴輪(8~10)。飾板の頂部(8)は片面にへう描きの直弧文がある。笠部と円筒部の接合部(9)と笠部の先端(10)の破片もある。10は傾斜がゆるく、別の形象埴輪か。^{註2} 圓形埴輪(11)。平面形態は長方形、上端部を連続して三角形に切りこみ、その下方に数本の凸帯をめぐらす埴輪の凸帯部分であろう。盾形埴輪(12)。盾のむかって左側外周の複合鋸歯文を表現する。裏面には円筒部へのとりつき部の剥離痕がある。

市庭古墳の円筒埴輪は今回の埴輪列、周濠内出土品と、以前の前方部出土品とは、それぞれ胎土・形態等がこ^{註3} となり、製作集団のちがいを示すものかもしれない。埴輪の年代は有黒斑・B種ヨコハケからみて5世紀前半と^{註4} 考える。周辺の古墳ではコナベ古墳・平塚1号墳の埴輪に近いものである。

註1 川西宏幸「埴輪研究の課題」『史林』56-4 1973

註2 北野耕平「稲城考」『日本史論集』1975

註3 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978 B種ヨコハケの評価いかんでは、
窯焼成の初現もB種ヨコハケの初現まであげうる可能性もある。

註4 奈文研『平城宮発掘調査報告』VI 1975 奈良市教委『奈良市埋蔵文化財調査報告』1980

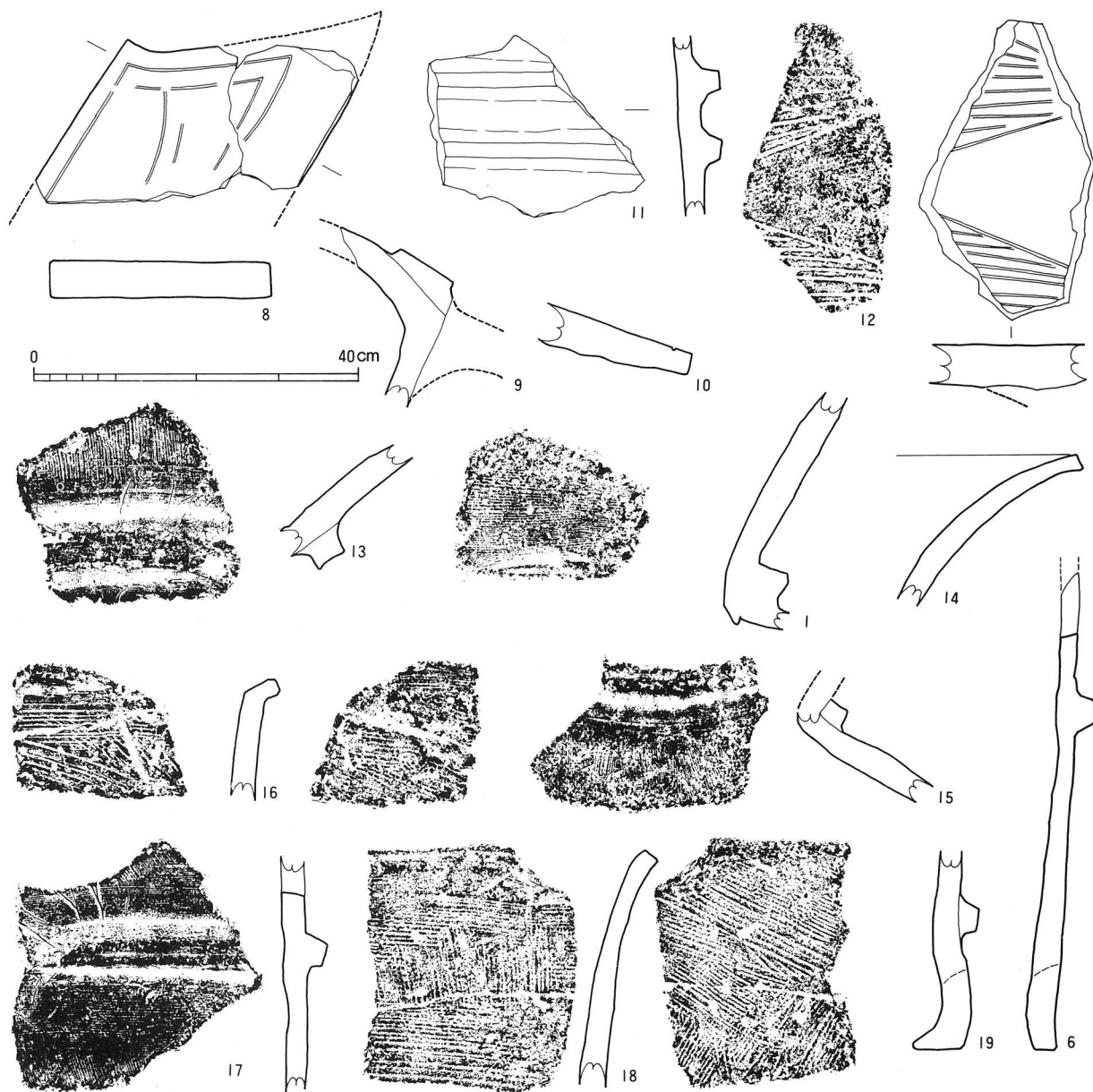


fig. 17 埴輪実測図

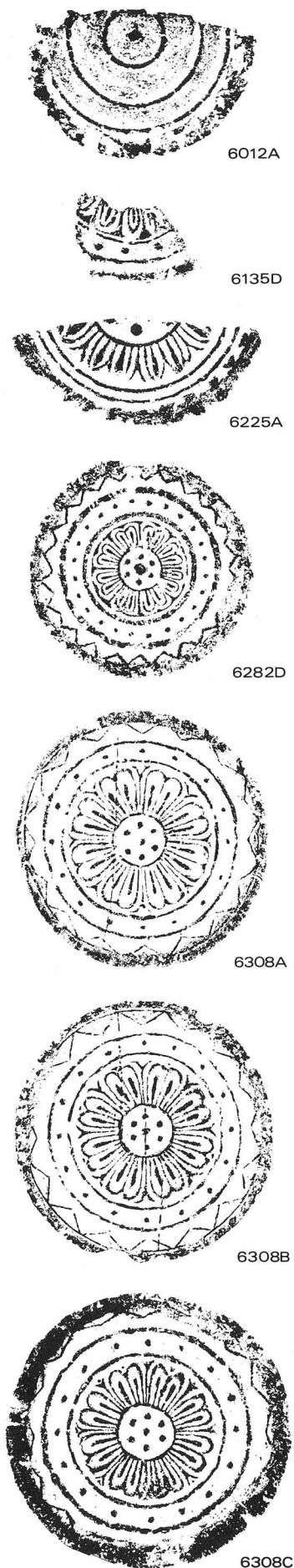


fig.18 軒丸瓦

2. 瓦埴 (PL.13~15、fig.18・19)

瓦埴類はK地区北辺を中心に発掘区のほぼ全域から出土したが、量は少ない。丸・平瓦が主体であるが、軒丸瓦が8型式31点、軒平瓦が8型式50点、埴が5点ある。なお、記述にあたっては奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を使用する。^{註1}

軒丸瓦 (PL.13・15、fig.18)

6012A 三重圏文。中央に珠点1を置く。瓦当裏面は浅く凹む。1点。

6135D 単弁14弁蓮華文。外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。蓮子は1+6。1点。

6225 複弁8弁蓮華文。外区に凸鋸歯文。外区と内区の境に二重圏線をめぐらす。中房は大きく、蓮子は1+6。瓦当裏面は平坦である。3点。うち2点はA種である。

6282D 複弁8弁蓮華文。外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。蓮子は1+6で、中央の蓮子が大きい。接合粘土は内外とも多量である。径13.2cm、全長36.3cm。2点。

6308 複弁8弁蓮華文。外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。蓮子は1+6。20点。A・B・C種がある。Aは中房がやや突出。范傷を示すものがある。径16.2cm。3点。Bは中房が突出するがAより低い。范傷を示すもの、顎部に刻印を施すものがある。刻印は「北」1種、「井」2種(PL.15-1~3)がある。径16.2cm、全長37.7cm。8点。

Cは中房が凹む。焼成後丸瓦部に釘孔を穿つものがある。径17.4cm、全長36.4cm。4点。

このほか6284型式が3点、小型の6313型式と藤原宮式が各1点出土。

軒平瓦 (PL.13・14、fig.19)

6641 右偏行唐草文。上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配す。段顎。C・F各1点、E2点出土。

6663 3回反転均正唐草文。中心飾りは花頭形、内外区を二重界線で画す。曲線顎。21点。A・B・F種がある。Aは唐草文第3単位の主葉と第1支葉が脇区界線に接す。両端部に范割れ痕のあるもの、平瓦部側面に刻印を施すものがある。刻印は「井」2種(PL.15-4・5)があり、うち1種が6308Bの刻印と同一である。上弦幅28.5cm、全長30.2cm。17点。BはAに似るが、唐草文第2単位と第3単位の間に珠文をおく。上弦幅29.1cm、全長37.9cm。2点。A・Bとも平瓦部凸面には縦位の縄叩き目が残る。Fは唐草文第3単位の主葉と第1支葉が脇区界線に接しない。1点。

6664 3回反転均正唐草文。中心飾りは花頭形、外区と脇区に珠文を配す。段顎。13点。C・D・F・I・K種がある。C・I・Kは花頭基部が界線に接しないが、D・Fは界線に接す。Cが5点、I・Kが各1点、D・Fが各3点出土。

6685 3回反転均正唐草文。中心飾りは十字形、外区と脇区に珠文を配す。段顎。Aが3点、Bが1点出土。Aは平瓦部凸面に縦位の縄叩き目を残す。

6721 5回反転均正唐草文。中心飾りは小字形、外区に珠文を配す。曲線顎。Cが1点、Eが4点出土。Eは平瓦部凸面に斜位の縄叩き目、凹面に布端痕が残る。1枚づくりである。上弦幅25.9cm、全長35.9cm。

6726E 3回反転均正唐草文。中心飾りは小字形。外・脇区は珠文。曲線顎。1点。

6732P いわゆる東大寺式に属す。新種。他種に較べて支葉の巻きが強い。直線顎に近い曲線顎。1点。以上のほか藤原宮式6647型式が2点出土している。

丸・平瓦

丸瓦はすべて玉縁式である。完形品でみると全長は約37cmであるが、径は14.5cm、16cm、18cm前後の3種がある。最大径の丸瓦は藤原宮からの転用瓦で、凸面にカキ目を施す。量は少ない。他は凸面をナデるが、一部に縦位の縄叩き目が残る。

平瓦は凸面に平行叩き目を施す藤原宮からの転用瓦と格子目叩きのものが少量あるが、大部分が凸面に荒い縦位の縄叩き目を施した軟質のものである。これには全長32~34cm、厚さ1.7cm前後のものと、全長約36cm、厚さ2cm前後のものがある。ともに1枚づくりの痕跡を残すものがある。

小結

今回出土した軒瓦は、総数81点と少ないが、6012Aと6732Pの2点をのぞけば平城宮と同範であり、各時期にわたり組み合わせをもって出土する傾向が認められる。平城宮出土軒瓦編年第一期（和銅元年~養老5年）には、6641・6647など藤原宮式軒瓦のほか6284-6664C・I・Kの組み合わせ、等II期（養老5年~天平17年）には6225・6308-6663と小型軒瓦6313-6685の組み合わせ、第三期（天平17年~天平勝宝年間）には6282-6721の組み合わせがある。第II期の6663は、平城宮において6225と組み合わせ朝堂院式と呼ぶが、本調査区では出土比率から6308と組み合わせる。とくに、6308Bと6663Aは同一の刻印「井」が押捺されており、一組として生産、使用されたことがわかる。

近年、平城京内においてもまとまった量の瓦を出土する遺跡が増加し、その中には宮と異なる瓦を別個に生産・使用した場合があったこと、これらは神亀元年(724)の邸宅への瓦葺き奨励を反映したものであろうと指摘されている。本調査区の瓦の様相は、既述のようにこれと異なり、各時期にわたって宮と同範のものが使用され、その中に平城遷都に伴って再利用されたと考えられる藤原宮式を含む点に特徴がある。本調査区は平城宮北辺に位置し、平城宮造営当初から宮と密接な関連を有した公的性格の強い地域であったと考えられる。

註1 『平城宮出土軒瓦型式一覧』(奈文研1978)

註2 『奈良国立文化財研究所基準資料II 瓦編2解説』(奈文研1975)

註3 「北」の刻印も両者にある。『同上 瓦編5』(1977)

註4 『平城京朱雀大路発掘調査報告』(奈良市1974)。『平城京左京三条二坊』(奈文研1975)。

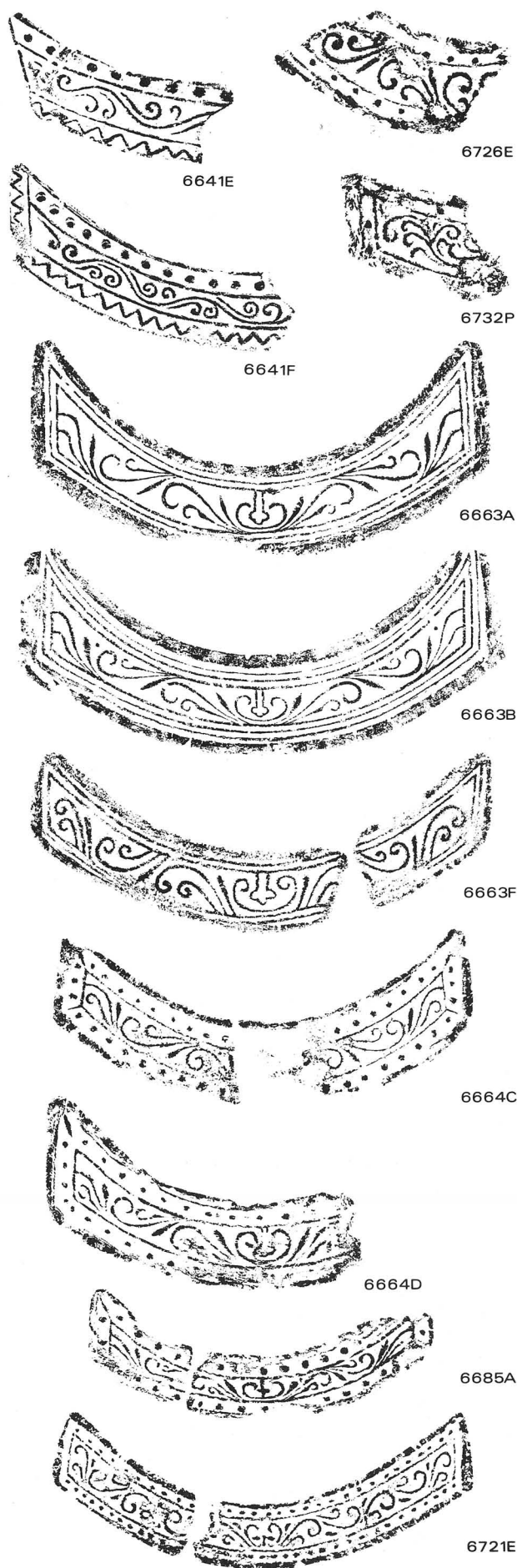


fig.19 軒平瓦

3. 土器 (PL.15、fig.20)

土器類は、調査区全域から土師器・須恵器が出土したが、概して少量である。

S K 2158出土土器 土師器皿A(7)・椀A(6)・高杯(8)・カマド、須恵器甕がある。平城宮Ⅴに属する。土師器皿Aは底部外面へう削りである。椀Aは口縁部外面にへう磨きを施す。高杯は脚部を欠失する。杯部外面はへう削りの後4回にわけてへう磨きする。

S E 2163出土土器 土師器杯C(11)・高杯・甕A(9)、須恵器杯B蓋(10)・壺A(12)がある。平城宮Ⅲに属する。土師器杯Cは底部外面へう削りである。甕Aは口縁部外面は横なでし、内面は横方向のハケメを施す。体部外面は斜方向のハケメで調整する。須恵器杯B蓋は頂部外面をロクロへう削りする。内面を硯に転用している。壺Aは口縁部は短く立ちあがり、肩部はなだらかである。体部外面はロクロへう削りするが、上半は削りの後なでを加える。肩部は灰をかぶり、蓋とともに焼成された痕跡を残す。

その他の土器 土師器椀A(5)は口縁部上半を横なでし、以下は不調整である。土師器蓋(2)は頂部外面から縁部にかけてへう削りし、その後、つまみを狭んで4回わけのへう磨きを施す。須恵器壺E(4)は広口短頸の小型壺で、口縁部はすどく屈曲する。体部下半はロクロへう削りし、なでを加える。広口壺蓋(1)は頂部外面をロクロへう削りする。須恵器甕(3)は平底の底部外面に木葉痕がある。体部外面は平行線叩き目、内面には細かい当板同心円文をとどめている。1・2は性格不明土壇、3～5は遺物包含層から出土した。

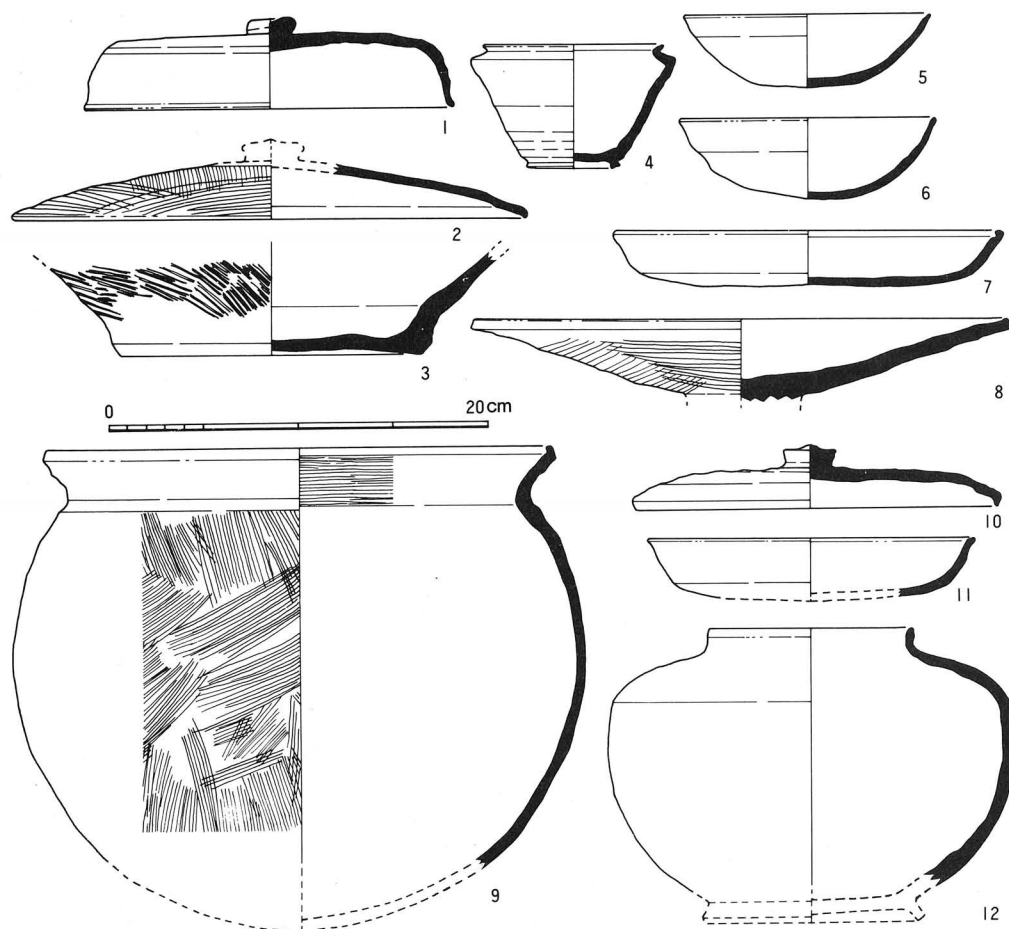


fig.20 土器実測図